

大澤壽人《てまりうたロンド》について

生島 美紀子 (大澤資料プロジェクト代表)

大澤壽人(おおさわ・ひさと、1906-53)は、最近まで幻とされていた天才作曲家である。神戸に生まれ、1930年渡米。ボストン大学とニューイングランド音楽院で学び、戦前の邦人による最大級の《交響曲第一番》や独創的な《コントラバス協奏曲》などを作曲。S. クーセヴィツキに認められ、新進前衛派として注目を集め、1933年には日本人として初めてボストン響を指揮した。

1934年仏に渡り、エコールノルマル音楽院でP. デュカ、プライベートでN. プーランジェに師事。翌年、コンセルバトワール管弦楽団を率いて自作自演の大演奏会を開催。J. イベールに称えられる鮮烈のバリデビューを果たして、華麗な経歴を築いた。

帰国した1936年以降は、時代の暗転と楽壇の無理解に巻き込まれたが、活動拠点をラジオに移して創作を続けた。《てまりうたロンド》は、太平洋戦争下の1943年に放送を通じて発表された作品で、戦禍の対極に安らぎを求めめるかのような平明さを保つ。

鞠の跳ねる様子を模す連打の合間から、聞こえてくるのは江戸時代からの手毬唄《向こう横丁》。これを繰り返す間にエピソードが2回挿入されて、「小ロンド形式」となる。交響大作を得意とした大澤の、心優しい一面を伝える小品である。